サブトラマンは、プロデューサー！

ライトスラッガー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アイドルの新米プロデューサーである男にはある秘密がある。

あるとき、平和な世界に怪獣が現れた。壊れかけたビルから女の子を助けたプロデューサーは、その命を失ってしまう。そのとき、その勇気に心を打たれた光の国の使者と合体をしたのだ。戦え！我らがヒーロー！何だって？影が薄いだと？そんなことなどどうでもいい！

アイドルマスターシンデレラガールズとウルトラマンのクロスオーバーです。誰得なのかと言われると、俺得ものです。

最近とある方に影響を受けたので思い切って書くことにしました。初心者なので拙いものですが、温かい目で見ていただけると幸いです。あと更新は不定期とさせていただきます。

そしてこの話しの主人公はプロデューサーです。アニメとは何にも関係はありませんので、ご了承ください。

目　次

来た！我らがプロデューサー！

サブトラマンＰ誕生！ ―― 1

元気の源 ―― 7

アイドルチャンネル ―― 13

餅つき大会！前編 ―― 21

来た！我らがプロデューサー！サブトラマンＰ誕生！

「待て！」
「へっへ、そう簡単に捕まるかよ！」
暗い宇宙空間を飛ぶ二つの光。片方はカセットコンロのような形をした宇宙船だったが、もう一つは紅と銀の身体を持つ巨人だった。二つはすごい速さで飛び回りながらも、お互い一定の距離を保って戦闘をしていた。
戦況は宇宙船の方が劣勢で、宇宙船のエネルギーもそろそろ切れかけているのか、スピードが少し遅い。
「しょうがない、行けベムスター！少しでも奴を足止めするんだ！」
「くらえ!!」
突然宇宙船の膨らんでいた部分がぱっくりと裂け、中で巨大な何かが目を覚ました。
開いたと同時に巨人が放った逆エル字に手を組んだ虹色の光線は、その光線は宇宙船から顔を出していた何かに命中してスパークを起こし、小さな爆発を起こした。しかし宇宙船と出て来た怪獣もどちらもほぼ無傷で、怪獣は宇宙船から飛び出していった。すると急に宇宙船の速度は早くなったのである。重いものを捨てたおかげでスピードが増したのか、逃げられる前に巨人は先に宇宙船を追いかけようとしたものの、宇宙船から飛び出してきた怪獣に邪魔をされてしまった。
「ベムスターが盾になったおかげで損傷は少なかったな。そのままやれ！」
「ベムスターだと!!」
ベムスターと言う怪獣は巨人に向かって、頭にある角（レイホーン）で突進をした。巨人は身構えていたため回避が出来たが、追いかけていた宇宙船は遠くに行ってしまい、折角尻尾を掴んだ犯罪者を逃がしてしまうこ

とに焦っていた。
（まずい、この先はこの宇宙の地球がある！何とかしなくては・・・！）
苦肉の策として、巨人はもう一度腕を組み、光線を宇宙船に向かって放った。光線はずっと遠くにあった宇宙船に命中し、大破爆発してそのままフラフラとどこかに墜落していった・・・・
しかし安心は出来ない。
「あとはベムスターだけだ！」
ベムスターはもう一度猛スピードで巨人に突撃をした。巨人はそれをもう一度躱したが、なんとベムスターはそのまま地球がある方へ飛び去ってしまった！
「しまった!!」
既にベムスターは光線の届かないところまで行ってしまい、巨人は大急ぎでベムスターを追いかけた。

俺はパソコンを打つのを止め、長時間座っていて硬くなった体を伸ばした。今度やるイベントの企画書は半分まで完成しており、あとはもっとどう面白くするかなど構想を練る。
大学を卒業した後、特に着きたい職も無くてブラブラと放浪しているときにこの会社の社長に拾われた。社長曰く、ティン！ときた。だそうだ。その後に仕事のノウハウを叩き込まれ、現在に至る。その仕事とは・・・・
「おーい卯月！それに凜に未央の三人、そろそろレッスンの時間じゃないのか？」
「あ、そうでした！プロデューサーさん、行ってきます!!」
「ごめんプロデューサー、行ってきます」
「私も行ってくるね！」
そう、アイドルのプロデューサーになってしまった・・・・・
知識もないのに・・・だ。初日は所属アイドルとの顔合わせと、ス

カウトで時間は過ぎていった。正直最初はかなり手間取った。右も左も分からない状態だったが、社長に教えてもらいながらも小さなライブハウスなどで細々と活動を続けていった。すると小さいながらも名前が知れていき、ラジオで曲が放送された。

そしてこれを聴いたテレビ会社に取り上げてもらい、テレビ局に来ている色々な会社に売り込んで、ちょっとずつだが出向いて仕事を手に入れられるようになってきた。

「さぁて、早く仕上げようかな」

静かになってしまった事務所で俺は一人キーボードを淡々と操作する。今製作してるのはやはりライブハウスで行うものだが、最初は少なかったお客さんは今や１００人は超えた。

一歩ずつ進歩していると思いながら、俺はいつか大きなライブ会場を贅沢に使ってやろうと心に留めるのだった。

「そこまで！今日の分は終わりだ。お疲れ様」

トレーナーの言葉で、全員が床に崩れ落ちた。

「はぁー、やっぱり大変だね！レッスンは」

「ふぅ・・・ふぅ・・・うん。でも、前より上手くなってる気がする」

「凛ちゃんの言う通りです。私たちで頑張りましょう！」

俺は外からその光景を眺めていた。互いに励まし合っている彼女らは、楽しそうにきらきらとしている。彼女らをもっと育ててあげたい・・・・・・まだ幾分か俺の力が足りないが。

「お疲れ様」

「プロデューサーさん」

「あ、プロデューサーさん！」

トレーニングルームに入ると、一番に卯月が俺に立ち上がって近づいてきた。他二人も立ち上がって今日の成果を報告して、俺は差し入れのスタミナドリンクを渡した。勿論トレーナーさんにもだ。三人は嬉しそうに飲み干し、その笑顔は車に乗るまで絶えることはなかった。

「やれやれ、疲れて寝ちまったか」
外に出た時にはもう日が沈みかかっており、ルームに備え付けてあったシャワーを浴びて車に乗ると、三人はすぐに眠ってしまった。スヤスヤと寄り添って眠る三人を家まで送り、俺はもう一度事務所に戻った。相変わらず一人で、社長も営業でよく出てしまっているのだ。だから、ガラッとしている事務所は、正直とても寂しい。
「はぁ、もっと上手く仕事が出来たらな・・・・」
もう既に時刻は２１時を迎えようとしており、終わったとしても家に帰りつくのは２２時頃だろうと俺は思った。今日もコンビニおにぎりで夜を過ごすことになりそうだと思うと、つい深いため息が出てしまった。
最後の書類をまとめた後、俺は帰る用意をして電気を切った。
あとは事務所の鍵を閉めるだけだ・・・・・・そう思ったとき、大きな地震が事務所を襲った。ここは大通りに面していて、窓からよく外が見える。そして俺は、その恐ろしいものを見て固まってしまった。
「何だアレは!!」
「怪獣だ!!」
そう、そんなに遠くない空を、一見五十メートルはありそうなデカい化け物が飛んでいたのだ。そのせいで街は混乱し、人々が怪獣から離れて行くのが分かった。慌てて社長に電話しても繋がらず、俺は一先ず逃げることにした。この様子では電車も止まっている事だろう。車も、道路には車を捨てて逃げた人の車が止まっており、どの交通面も期待できそうではなかった。
そして遂に怪獣は地面に降り立った。耳を刺すような甲高い咆哮をすると、頭にある角から光線を出して町を破壊し始めた。謎の光線を受けたビルは無慈悲にも崩れ落ち、凄い衝撃と音が響き渡った。
俺も人混みに紛れて逃げ出すなか、倒壊しかけのビル近くに子供が倒れていることに気が付いた。他の奴らは我先にと逃げて子供には気が付いていない。俺はそれが見捨てられず、その子の下に駆け寄った。

「君！大丈夫か!!」
「・・・・・・」
「君!!」
「うっ・・・・・ううっ」
女の子だった。しかもよく見ると足を怪我をしており、泣いていたのか目も腫れている。一人で怖くて動けなかったのだろうと思うと、俺は心を痛めた。
「マ、マ？」
「違う。だけどここは危ないから一緒に逃げよう！」
「え？・・・・・あぁっ!!」
――――――――俺は一瞬だが、起きた出来事が理解できなかった。頭の上で大きな大きな音がしたかと思うと、ビルの大きな瓦礫が俺と女の子めがけて降って来たのだ・・・・
「ああっ・・・・・」
「嫌――――――ッ!!」
あぁ、死ぬんだ。そう呆然としていた俺は、女の子の悲鳴で正気に戻った。俺はそのとき、無意識に体が動いていた。
「危ない！」
俺はとっさに女の子をビルから突き飛ばした。はぁ、死ぬのか。と、ぼんやり思ったが、特に恐怖は無かった。
落ちてくるのが遅いな・・・そう思った次の瞬間、俺は意識を失った・・・・・

「無事ではないな、被害を出してしまったか・・・・それに・・・」
巨人は倒れたビルを見下ろした。そこには、崩れたビルの前で泣いている女の子が居た。一人で瓦礫を除こうとしていて、幾人かは女の子を手伝おうとしているが、殆どの人間は逃げ惑うばかりだった。
「他人を庇った勇気ある人間だ。それに、この世界には力が満ち溢れている・・・・留まる理由もあるな」
巨人は、瓦礫の下敷きにされた人間に意識を繋げた。

「ここは・・・？」
「君の意識の世界だ」
「誰だ?!」
俺は確か・・・押し潰されて地面と瓦礫のサンドイッチになってしまったはず・・・・しかし誰だ？眩しくてよくわからない。
「確かに君は死んでしまった。だが、君の勇気ある行動に私は胸を打たれた。だから、私に少し協力してほしい」
「協力だと？」
目の前にいると思われる何かに返事をしながらも、かなり胡散臭い話しに納得はしていない。どういうことだ？
「あの街で暴れている宇宙大怪獣、ベムスターを倒さなければいけない。しかし私も、ここへ来る途中で体力をかなり消耗してしまった。だから助けてほしい」
「・・・・分かった、手を貸そう！」
納得はしなかったが、しょうがないと思って頷いた。巨人も小さく頷くと、俺に鮮やかな青い石の付いたブレスレットを渡した。晴れた空の様に綺麗な青だ。凜が気にいるだろと思っていると、巨人は言った。
「非常に申し訳ないが、ソレを使って一緒に戦ってほしい」
「もう諦めたよ。俺はどうすればいい？」
「そのブレスレッドを掲げて私の名前を叫んでくれ」
「名前？」
「そう、私の名前は――――――――」

「ウルトラマンゼノン」

元気の源

俺はブレスレットを左腕に装着した。手によく馴染んで痛くもない。

意識の世界から目が覚めた俺は、瓦礫の隙間から左腕を掲げて叫んだ。

「頼んだぞ！」

「ああ、ゼノーン!!」

それは今まで味わったことのない、不思議な感覚だった。俺の身体が暖かな光に包まれたかと思うと、上下の認識が一切なくなって、気が付いたら自分の目線はビルと同じか、それ以上になっていたのだ。

ウルトラマンはテレビの中にある空想の存在だけだと思っていた。しかし変身した・・・・・俺が、ウルトラマンに・・・・!!

「キエェアア!?」

ベムスターはいきなり現れたこちらに気が付き、ゼノン（俺）に向かって攻撃を仕掛けた。

ベムスターは飛び上がったあと、軸合わせを行わず突進を仕掛けてきたが、ゼノンはそれを宙返りで躱した。着地先でブレスレットからベムスターの背中にスラッシュを撃ち出し、体制が崩れた内に今度は接近戦を試みる。

しかしベムスターは振り返りと同時に光線を放った。

「キエェエ!!」

「デュワ!?」

（ッ！スパークシールド!!）

俺はとっさに円形のバリアを張ってベムスターの光線を防いだ。しかし接近しようにも光線が止まる気配がない。

俺は一か八か、バリアを解いて賭けに出た。

「デュッ!!」

前転で光線を回避し、首はね起きの要領でベムスターの顔を蹴り飛ばした。次に俺は、よろけたベムスターの懐に入り込み、左のブレスレットで首に手刀を当てた。ブレスレットには打撃を強化する能力

があるらしい。これら一連の動きに対応できなかったベムスターは、背中から後ろに倒れて、大通りの道路の上でジタバタともがき始めた。

（脳をゆすぶられたんだ。うまく立てない今がチャンスだぞ！ブレスレットをマックスギャラクシーに変えてくれ）

俺はブレスレットを自分の光に照らした。するとどうだろう！何とブレスレットは、七色の光を放ち、とてもカッコいいアイテムに変身した。真ん中にはブレスレットにも着いている宝石があり、形は鳥が翼を広げたようなデザインだ。

俺は宝石に光の力を溜め、それをベムスターに向かって一気に解き放った!!

「ギャラクシーカノン！」

「キエエエエッ!!!!」

非常に高いエネルギーがベムスターに命中し、ベムスターは爆発消滅した。

俺が次に目覚めた場所は、再びあの瓦礫の中だった。しかし今回は違う。女の子やその他の人たちが、穴の外から俺の顔を覗いていた。

「居たぞ!!ここだ!!」

時間をかけて、集まった人たちによって俺が救出された。怪我は少なく、ただ擦り？いたりしているだけだった。

「運がよかった！瓦礫の間に挟まっていて助かったんだ!!」

「・・・・そうか、助かったのか」

未だに俺の中では戦っていたという感触が残っていた。今も俺は温かい光の中にいるようで、少しポカポカしている。

すると、助けた女の子が俺に泣きながら抱き着いた。おっと、まずいかな？と思ったが、そんなことはなく、俺はずっと泣いている彼女の頭を撫でてあやした。

「あ〃りがどうございまず！あ〃りがどうございまず！」

「もう大丈夫。俺は何ともないし、君も無事だ」

「千枝ちゃん、本当によかったですね」
「はい！ちひろさん!!」
そうか、千枝ちゃんというのか。ちひろと呼ばれた黄緑の上着を羽織っている女性は、千枝ちゃんの手を繋ぐと俺を見て深いお辞儀をした。俺は女性にそんなことをされたことはなかったので、あわあわと戸惑ってしまった。
「千枝ちゃんを助けて頂いてありがとうございました」
「い、いえいえ！大丈夫です!!」
「本当に、ありがとうございます」
ちひろさんは、千枝ちゃんを家に連れて帰る途中だったらしい。逃げてる途中にはぐれてしまって探している時、崩れた瓦礫の前で泣いている千枝ちゃんを見つけたそうだ。
ちひろさんは俺が声を出して生きていると分かると、真っ先に瓦礫を持ち上げようとしてくれていたらしい。
こっちからすればそれこそ有難いことだ。
「皆さんも、本当にありがとうございました」
俺は改めて、助けて頂いた全員に頭を下げた。その場に居た誰もが笑って、お互い様だ。と言ってもらった時は、胸がジーンと熱くなった。
（人間というのは、温かい生き物だ）
ああ、ゼノンの言う通りだと思う。しかし街は今回の事件でボロボロになってしまった。それでもまた必ず復活するだろう、こんな温かい人たちがいる限り・・・・

翌日、俺は不安を抱きながら事務所に向かった。朝のニュースでは、昨日の出来事がどの番組でも取り上げられていた。テレビで放映されたウルトラマンと酷似している巨人に怪獣。それは空想などではなく、本当に存在したということ。
その証拠に、戦ったあとの道路はところどころ割れており、未だに

倒壊寸前のビルまである。そんなとこにはＫＥＥＰ　ＯＵＴと書かれたビニールテープで立ち入り禁止となっていた。そのおかげで難なく通れた場所が通行止めのせいで迷路のようになっており、事務所まで遠回りしないと行けなくなっていた。

おかげでいつもより三十分遅れてギリギリの到着だった。危なかった、ゼノンが起こしてくれなければ完璧遅刻だったと思う。

「おはようございまーす」

「お、来たね我らがプロデューサー！」

「しゃ、社長!?」

珍しい！社長が居るなんて・・・・！今回帰って来たのはお土産を置きに来たためらしい。置いたらまたすぐに発つそうだ。

うちの社長はいつも営業先でコネ作ってはお土産を持って帰って来る。そして今回もお土産があるというが・・・・

「一体何なんですか?まさか、またスペペペプじゃないでしょうね?」

一回目のお土産は卯月達の三人含めて鳥肌が止まらなかった。しかもアレは食用だというから驚きだ・・・

そんな雰囲気を読み取ったのか、社長はゴホン！と咳払いをすると、入ってくれ。と言って奥にある談話室のドアを開けた。

「初めましてプロデューサーさん！今日からここの事務員を・・・・させ・・・ていただ・・・く・・・・・えっ?」

「あれ?あっ！あなたは昨日の!!」

「ん?二人とも知り合いかね?」

お土産って、ちひとさんの事ですか!?俺は開いた口がふさがらなかった。ちひろさんも相当驚いている様子で、ぽかんとしている。社長はこの空気を気にもせずに話を続けた。

「ティン！ときたから事務員としてスカウトしてきたんだよ。君い、しっかりとちひろ君をサポートしてくれよ」

「ちょっ、社長！」

「では、オ・ルボワール！」

社長は俺らの返事を待たずにまたどこかに行ってしまい、この場に

変な空気だけが残ってしまった。何というか、世界って狭いと感じてしまった。
「あの、仕事・・・しますか」
「あ、はい」
耐えがたい空気は仕事で打ち消すとしよう。俺は今度やるライブの予算を計算し始めた・・・・

「私は千川ちひろと申します。みなさん、よろしくお願いします」
「わぁ、私は本田未央！１５歳でーす！」
「私は渋谷凛・・・・・です」
「私は島村卯月です。笑顔なら誰にも負けません！」
午後、学校を終えた三人とちひろさんを合わせたが、どうやら何も問題はなかった。うまくコミュニケーションが取れないと雰囲気が悪くなってしまうからな。
俺はパソコンにもう一度目を向けると、今度はオーディションのファイルを作り始めた。俺はプロデューサー兼マネージャーだ。だから、こういうのには目を通しておく必要がある。
「あれ？」
その中で、一つ覚えのある名前に目が留まった。それには「佐々木千枝」と書かれたプロフィールだった。写真もあの子で間違いはなかった。どうやらアイドル養成所に居たらしいが、社長が勧誘したようだ。あの人は・・・・全く。
一息つこうと席を立った時、ちひろさんに声を掛けられた。
「プロデューサーさん、昨日は大丈夫でしたか？」
「え？ああ、本当に大丈夫ですよ」
「ですが、一応これを」
渡されたのはキンキンに冷えたスタミナドリンクだった。俺は受け取ってちひろさんにお礼を言うと、星形の蓋を開けて飲み口に口に着けた。

疲れた身体と五臓六腑に染み渡るこのエナジー!このシャキッとする様な、シュワっと懐かしい、ウルトラなサイダーを飲んでいる気分だった。こんなものは飲んだことがない!!

「美味い!!!」

「ふふっ、それ、実は私に手作りなんですよ」

つい叫んでしまったが、それ以上に驚いてしまった。これがちひろさんの手作りだったとは!!

「これはいいですね。市販のものよりとても美味しくて飲みやすいですよ!!」

「でしたら、私がこれから作ってきましょう。ただ・・・・」

「ただ?」

ちひろさんは言いづらそうに口ごもった。どうしたのだろうかと思い聞いてみると、材料と手作りだから、一度に量産は出来ないとのこと。それでも構わないので、俺はちひろさんに強く頼み込んだ。

「何してるんですか?」

「あ、卯月」

俺がちひろさんに頭を下げていると、ひょっこりと、扉から卯月が顔を覗かせた。俺は卯月をルームに呼び込むと、俺が飲んだのと同じのスタドリをコップに注いで渡した。

「何ですか?これ」

「まあいいから、飲んでみろ」

卯月は恐る恐るチビッとだけ飲むと、次に飲むときは勢いよく飲み干した。

「ぷはっ、何ですかこれ!!凄い美味しいです!!」

「ありがとう卯月ちゃん」

「これ、ちひろさんが作ったんだってさ」

卯月はそれを聞くと、ちひろさんにごちそうさまでした!と、太陽の様に明るい笑顔を向けながら言った。

その後、他の二人にもこのことが知れ、これを飲んだ後の仕事は必ず大成功となるのだった。

アイドルチャンネル

「プロデューサー、春・・・・だね」
「そうだな」
オフの俺は少し遠出の散歩をしていた。充てもなくブラブラ歩いていると、これまたオフで犬（ハナコというらしい）の散歩に来ていた凛とばったり出会った。今は休憩中・・・公園のベンチで夢うつつである。
暖かな春の日差しは、あのゼノンと合体したときの様に心地が良い暖かさだ。うっかりしているとこのまま寝てしまいそうだが、さすがにまだ肌寒いから眠気はすぐになくなった。
「天気もいいよね」
「そうだな」
「こんな天気のいい日には仕事なんか忘れて、のんびりしたいな」
「そうだな」

「・・・仕事・・・ないん・・・だけどね」
「・・・・・・・」
しばらく沈黙が続いた・・・・・

「「ウルトラキングラジオのゲストに!?」」
「そう!それに何と三人に来てほしいと連絡がありました!」
・・・これは俺も本当に驚いた。昨日の昼頃、事務所に一本の電話が掛かって来たのが事の発端だ。向こう側では渋いおじさんの声で「お願いします」とだけ言われ、こちらには何も伝わっていないのに切られたのだ。俺は急いで局に確認を取り、その日に打ち合わせに向かうと、そこで何と三日連続で一人ずつゲストとして参加してほしいと言われたのだ!
めでたい、これは最初としては大きすぎる収穫だった。

「勿論全国放送です！一人ずつ放送されるみたいなので、ある程度私たちの名前は知られると思いますよ」
「ほえー・・・・・キングラジオは私も知ってる」
「確か、あの小泉純二郎さんがメインのあの番組だよね？」
「それに私たちが呼ばれたんですか!?」
小泉純二郎・・・身長百六十九センチ、体重六十キロ、御年７４歳。昔テレビで大人気だったアナウンサー兼司会者だ。入社当時から体を張ったリポートや、お笑い芸人張りにおかしな姿をする有名人だった。今でもテレビにゲストとして参加すると、アナウンサーの頃だったエピソードなどを話してお茶の間を沸かせる大御所である。
「一週間後だ。一週間後に収録がある」
テレビで見たことある有名人に委縮しないで、自分をしっかり出せるといいのだが・・・
「えっ、そんなにすぐなんですか!!?」
「・・・・・・」
「しぶりんの顔が無茶苦茶強張ってるよー」
「未央ちゃんも緊張してますよね？」
「うぅ・・・そりゃあ、ね？」
今からこんな調子で大丈夫だろうか・・・・・・
（艱難辛苦、だな。私もまだルーキーの頃は、セブン教官に厳しく教わったものだ）
セブン？セブンって、あのセブンか？
（ああ、この世界は我々ウルトラマンがテレビの世界だが、君が言うあのウルトラ兄弟の三番目、ウルトラセブンで間違いない。セブン教官が地球に任務で出て行ったあとは、後任のタロウ教官にも教わったものだ）
「ゼノンにもあったのか」
（あぁ、大変だったよ。・・・・大変と言えば、あのとき私がゼットンに蹴られまくってるのを、テレビを通して外から見るとは思わなかったが・・・）
まぁ、ゼノンはあの時は助けに来たのか、戦いに来たのかイマイチ

曖昧だったからな。そこはしょうがないと思う。それにしても・・・そうか、そんな有名人に戦い方を教わったのか。こいつらも、何か学べることがあるといいのだが・・・・

そして三人はわいわいと話していたが、円陣を作って真ん中に集まっていた。いつもライブ前にやる掛け声で、それで三人はいつもスイッチが入る。

最年長の卯月が音頭をとり、それに二人が付いて行くのだ。

「みんな、いくよ!」

「「「おぉー!!」」」

(もうそんなに固くなってはいないな。この調子なら大丈夫じゃないのか?)

「・・・・ああ」

まあ、特に心配はいらないか。三人とも、上手くやってくれよ!

「はぁ、上手くできるか不安だなぁ」

「大丈夫だって!私たちなら出来るできる!」

「そうだよ卯月、未央の言う通り、私たちらしくやればいいよ」

三人は明日が日曜日のため、卯月の家で泊まって、プロデューサーから貰った台本を見ながら何をするかを話すことになった。パジャマは、レッスン用のジャージを持って来た。

三人は布団を敷き、真ん中に集まって台本を広げた。勿論プロデューサーが付箋などを付けて見やすいようにしてくれているのだが、素人の三人はイマイチ理解が出来なかった。

「タイトルコールで、私がこれを言って・・・」

「あれ?これ卯月と内容が違うんだ」

「ありゃ、私なんかお笑い芸人みたいなことさせられるよ」

三人は相談しながらどんな事をするのか想像していった。しかしやはり分からないところがあり、卯月が一階にある固定電話でプロデューサーに電話を掛けた。

「・・・・・あれ?」

何度プロデューサーの携帯に掛けても、「電波が届かない場所にいるか・・・・」となって繋がらない。試しに事務所の電話に掛けても、現在使われていないとコールが帰って来た。
卯月は、これはおかしいと思い、二人と相談しようと考え二階に上がろうとしたとき、母の驚く声が後ろで聞こえた。
「どうしたの？」
「テレビがおかしいのよ」
卯月はテレビの画面を見ると、そこには近所の住宅街が映っており、よく見ると端っこの方に自分の家があった。しかも画面の景色はゆっくりと前に進んでいて、まるで空からの景色を眺めているようだった。
「壊れた？」
「うーん、壊れたわけじゃなさそうだけど、チャンネルを変えても同じ映像だし・・・・おかしいわねぇ」
本格的におかしいと思った卯月は、どうしようかと悩んだ。
「あ、どうだったしまむー」
「どうしたの卯月。何か浮かない顔してるけど」
「うーん、少しおかしなことがあったんですよ」
卯月は二人にテレビに起きていることを話し、電話もおかしくて台本については聞けなかったと話した。
「ホントだ、回線が繋がってない」
「どうしてでしょう・・・・」
「分からない。だけど、電話が出来ないなら今日はここまでかな？」
「そうだね、今日はここまでにしとこっか！しまむーも大丈夫だって。こういうのは放っておくのが一番！」
「そうだよ卯月、なるようにしかならないと思うし」
未央と凛はそう言ったが、卯月はどうしても腑に落ちなかった。

「ふーっ、リラックスリラックス・・・・」
「お疲れ様です、プロデューサーさん」

「ちひろさんもお疲れ様です」
今日の分は定時までに終わらせることが出来た。タイムカードを押してから約一時間経った２０時。今は事務所でちひろさんとのんびりお茶をしている。
うちの社長も、居る時は社長室にあるコーヒーメイカーで化学実験の様にコーヒーをブレンドしており、仕事終わりにお茶が出来るほどフリーダムな職場である。だからこうやってのんびりしていても特に咎められることはないのだ。
・・・・さすがに徹夜で残業をしたら怒られたが、注意だけで済んだのは助かった。社長、怒らせると無茶苦茶怖いんだよな・・・・・
（ん？）
ソファに座ってうとうと舟を漕いでいると、突然ゼノンが訝し気な出した。俺はどうしたのか聞いてみると、電波の様子がおかしい。と言ったのだ。
・・・・・・電波がおかしいって、一体どういうことだ？
（いや、さっきから電波が吸い寄せられたり、一定だった電波乱れたりしているんだ）
「電波？」
「？、どうしました？プロデューサーさん」
「いえ！あ、俺ちょっと缶コーヒーでも買ってきます！」
「え？・・・・・あっ」
俺は事務所を飛び出して、屋上で左腕にあるブレスレットを掲げた。ゼノンがこうしてほしいと言ったからやったのだが、何かあるのだろうか。
するとゼノンは急に、わかったぞ！と叫んだ。何が分かったのか、俺は一人で納得して話さないゼノンに腹を立て始めた。
「で、何が分かったっていうんだ」
（ああ、これは怪獣の仕業だ）
また怪獣か！今度は何だって言うんだ・・・・
（電波、そしてこの妙な乱れ方・・・・間違いない）
「だから何が居るんだよ！」

俺はブレスレットをチョップして叫んだ。ゼノンは痛い！と言ったが、こっちはずっと置いてきぼりにされてイライラしてるんだ！
（すまない、これは電波怪獣　ビーコンの仕業だ）
「ビーコン？」
ビーコンは確か、帰って来たウルトラマンか何かで見たな。あれが居るっていうのか！
（今からビーコンを可視化させる。変身だ!!）
「おう！ゼノーン!!」
俺は左腕を突き上げて叫んだ。体がゼノンに合わせて巨大化していくのが分かった。
すると俺は初めて異変が分かった。ビルの大きな広告版に、ゼノンの姿と夜の街が映っているのだ。
（ビーコンの目はテレビカメラの様になっているんだが、その目で見たものを背中の棘から電波として送信されるんだ。だから、テレビなんか電波を受信して映るものは、ビーコンが見ているものと一緒の風景が送られてくる。他にも電波が乱れたりしているのは、大気にある電波をこいつが食べていたからだろう）
「そうか、だったら、電波がおかしい今はそいつが近くにいるってことか」
俺はゼノンの言葉をヒントに広告版の画面を見て、ビーコンが居るであろう場所にスラッシュを撃ちこんだ。
やはりその攻撃は何かに当たり、ビリビリとスパークを起こして火花が散った。
「ギィエエエ!!」
「出たぞ!!」
道路に墜落した怪獣の見た目は、まるでリモコンのように四角い体をしている虫のような姿だった。もう一度怪獣は浮遊すると、その怪獣の目は信号機のように三つ並んでおり、赤、黄、赤と夜の暗闇に怪しくギラギラと光っていた。
（気を付けろ、あいつのお腹の光は気絶するほど強いぞ）
「あぁ」

怪獣は口の上にある黄色の真ん中から赤い光線を出した。それを腕で弾いてガードすると、ビーコンはなお光線を放ちながら、すごいスピードで突進をしてきた！

「デュアァアッ!!」

衝撃と重さに耐えきれず、約五十メートルの体が投げ飛ばされ、ビル手前の地面に叩きつけられた。俺は急いで立ち上がると、もう一度突進をしてきたので、今度はうまく掴んで地面に叩きつけた。

ビーコンは苦しそうな声を上げた。しかしゼノンはあることに気が付いた。

（まずい、ビーコンの腹が光っている！）

「ダニィ!?」

気絶だけは勘弁だ！そう思った俺はビーコンを掴んで上空に放り投げた。

そして俺はブレスレットをギャラクシーに変身させると、マックスでも見せたような高速回転で飛び上がった。

「ギャラクシークラッシャー!!」

サイコクラッシャーのような動きでギャラクシーをビーコンの身体に突き刺した。

ドリルの様に回転する俺の動きでギャラクシーは深くまで刺さり、耐え切れなかったビーコンは断末魔をあげ、爆破消滅して消え去った。

「め、目が回った・・・・・・」

（そうか？私は大丈夫だったぞ）

変身を解いた俺は事務所の屋上に立っていた。高速回転したせいか物凄く気分が悪い。よくアレで気絶しなかったなと自分を褒めたいくらいだぞ・・・・・・

今回も近くで戦闘があったのにもかかわらず、事務所は無事だった。・・・・まあ、今回は周りの被害自体も少なかったようだが。

「今日はもう帰ろう・・・・・」

俺は中に戻ってちひろさんに挨拶をすると、事務所を出て行った。

外は屋上と同じくらいひんやりとして肌寒く、まだ吹く風が冷たいなぁ。

俺は何か暖かいものでも買って帰ろうと思い、近くにあるコンビニに入った。

次に帰れるのは何時くらいになるのか。俺はそう思いながら、買った肉まんを齧って駅の方へと歩いて行った。

餅つき大会！前編

「プロデューサー・・・それ、なに？」
「何って、臼」
（それは、臼・・・・なのか？私には生体反応があるように見えるが・・・・）
凜が信じられないような目で俺と臼を交互に見ているが、どっからどう見たって普通の臼だろ。餅をつく杵は無いけど・・・・
しかし、凜に同意するらしいゼノンも、呆れたような声でそう言った。
「ねえプロデューサー、これってどこにあったの？」
「小道具倉庫の中にあった。あ、そうだ、未央、これちょっと持ってみ」
「ええー！わたしがこれ持つの!?」
「いいからさ」
未央が渋々臼の側面を持って掴みあげると、未央は素っ頓狂な声を上げて後ろへバランスを崩した。
「なにこれ！物凄く軽い・・・・？」
「そうだろう？見た目の通り木材で出来てるんだけど、片手で持ち上げられるほど軽いんだ」
木で出来てるはずなんだけど軽い。一リットルの牛乳パックを持っているみたいな重さなんだが、大きいだけあって持ちづらいのが困るところ。
ちひろさんは冗談っぽく、餅つきでもしますか？と言ってきたが、卯月が真に受けて買いに行ってしまったのだ・・・・ちひろさんは卯月を追いかけて出て行ってしまった。
「それは・・・・・うん」
「しまむーは頑張り屋さんだからね！・・・・・ちょっと違う？」
（何だか、後輩のメビウスみたいだな）
そういえばウルトラマンメビウスは地球人の隊長の誕生日に、コーヒー豆ではなくて節分の豆を間違えて買ってたっけ。未だ天然とい

うイメージが強いな。
天然か・・・・・いや、うちの卯月はしっかりしてると思う。
「ところでプロデューサー、新しいアイドルの娘っていつ来るの？」
「ついにわたしたちにも後輩が！何だか楽しみだね、しぶりん！」
「え、うん、そうだね。まあどんな娘が来るのかは気になる・・・・かな」
そう、今日はオーディションを通した何人かと契約する日であり、顔合わせの日なんだ。・・・今思えば強烈な人が多かったと思う。皆とは喧嘩せずに、賑やかになってくれるといいのだが・・・・
「まだ来るまで時間があるんだよな・・・・」
「そっかー！じゃあお菓子でも買ってくる？」
「いや、大丈夫だ。確か、ちひろさんが何か買って来てたはずだから」
「そう言えば、私が初めて事務所に来た時もお菓子出してくれたよね。何か決まってるの？」
凛がそれ疑問としてくれたのはありがたい。社長の社訓、客人は丁重にもてなすべし。まあ当たり前のことを大事にする社長だからなぁ・・・・自分から進んでトイレ掃除とかもする人だし。
それに、ここには一応初めて来てくれるし、ここのアイドルになってくれるからいいイメージは持ってほしいじゃない。
そのことを凛に伝えると、へぇ、と、少し感心しているようだった。
「それなら、私は掃除しておこうかな」
「あ、ロッカールームの掃除しておかないと！しぶりんダッシュ!!」
（詳しくは詮索しないが、ロッカールームって汚れるものなのか？）
「・・・・いや、知らない」
それよりもこの臼をどうしようかだが・・・・・・完全に事務所のスペースを取ってるんだな、これが。
俺は臼を持ち上げて、もう一度倉庫へ向かった。大きいからしょうがない。
ちひろさんには、餅つきしたあとは絶対に片づけてくださいって言われてしまったからな・・・・

餅か、つくのか？

「ちょ、ちょっと待ってぇや！」

「ん？」

（やっぱり臼だ！おい、臼を見ろ！）

え？ゼノンのブレスレットが急に光って、細く伸びた青い光が臼を示した。俺は臼を顔の前まで持ち上げると、そいつと目が合った。・・・・・ん？

「うわっ!?」

何だこれ!!か、顔に、口から飛び出したでっかい牙!!?こ、こいつ怪獣だったのか!!

俺は驚いて落としてしまった拍子に、臼を床に落としてしまった。

「イテッ！もうちょっと優しくしてや」

「な、何だお前!?」

（ん？光の国で見たことがあるぞ。こいつは・・・・確か、うす怪獣モチロンだったはずだ）

「モチロン？」

（大隊長（ウルトラの父）が光の国で餅つき大会をするときにタロウ教官が連れて来ていた記憶がある。ちなみに米は、この宇宙とは別の地球にある日本の新潟産だ）

「ちょっと、わてを無視せんといてくれるか」

「あ、悪い悪い」

へぇ、こいつモチロンっていうのか・・・・何だか鬼瓦みたいな顔してんな。

「わてはここの社長さんの爺の爺の代から作られた臼やねん。よろしゅな！」

「・・・・それって、どれくらい前だ？」

「せやなぁ、ざっと四百年は前やなぁ・・・・」

（四百年・・・そうか、このモチロンは付喪神なんだな。基本無害だろう。それに、モチロン自身も悪い怪獣ではないぞ。ただ・・・・）

「ただ？」

（餅が好きすぎて、教官がついた餅を片っ端から食べて大隊長に説教されていた。それくらい餅が大好物なんだ）
「あぁ・・・・」
餅限定で大食漢なわけか。しかも戦うとしたらパワー型。ゼノンとしても、こんなやつとは戦いたくはないだろう。
「ところであんさん、そろそろ新しい娘が来るんとちゃうん？時計見いや」
「え？あっ、しまった!!」
もうこんな時間か!!急いで準備しないと!!まさかモチロンに言われるとは思わなかったが、あそこにいて話を聞いていたなら当然か。
「ただいまー！」
「ただいま戻りましたー！」
急いで机に戻ろうとすると、ドアの向こう、ルームで女性二人の声が聞こえた。ちひろさんと卯月が帰って来たようだ。
「お、お帰りなさい！」
「あれ？どうしましたか、プロデューサーさん」
「あ、プロデューサーさん！見てください、もち米を買ってきました!!」
卯月とちひろさんの腕には、スーパーで買ったと思われる米が入った袋が一つずつあった。結局買ったのか・・・・
「プロデューサーさん、最近お仕事も取れるようになってきましたし、お祝いに餅つきをしませんか？」
「ちひろさんの提案なんです！ダメ、ですか？」
「ちょーっと待ったー!!話は聞かせてもらったでー!!」
そんな声が部屋に響き、ゴロゴロと、モチロンが器用に扉を開けて入って来た。
「・・・・えっ？」
「プロデューサーさん、これって、さっきの臼ですよね？」
ちひろさんの言う通り、これはさっきの臼なんだが、説明が面倒くさい。どう説明したらいいのやら・・・・・・
「餅あるところにわては居る！餅つきするんやろ？わてが嬢ちゃん

たちの為にいっぺんつかれたるわ!!」
「・・・・はぁ?」
「卯月ちゃん、ちょっとちょっと」
モチロンのせいで場の空気が・・・・・・誰か助けて!!
「ふいー、掃除終わったよー!」
未央―ッ!助かった、今度ちゃんと仕事とってきてやる!!
「ねえ卯月、たまには自分の周りを掃除しようか。どうするのあれ」
「えへへ、整理整頓って、なんだか苦手で・・・」
やっと空気が変わったな。ふぅ・・・・・
「またわてが無視されとらんか?」
「うわ!?臼が喋ってる!!」
「ええ!?・・・・本当だ。プロデューサー、なにこれ」
かくかくしかじか・・・・俺はこれまでの経緯を未央たちに教えた。
未央はさっきと違って、臼であるモチロンを興味津々に撫でまくると、にかっと笑ってこう言った。
「プロデューサー!これ持って帰っていい!!?
「ははっ・・・・」
(未央、やめておけ)
さすがの俺とゼノンもこれには苦笑い。未央、それのどこが気に入ったというんだ・・・・・?
「何か可愛いじゃん!私こういうの好きだけどなー」
「うちにはもうハナコが居るから・・・・」
「私も、ちょっと怖いと思います」
俺は三人が話している時に、ふと今何時だと時計を見た。ヤバい、新アイドルがもう来てる時間だ!しかも集合場所はここだから、モチロンをもし見られたら厄介なことになる!!
「三人とも、それ隠せ!」
「え、何で?」
「そろそろ新しい娘が来てる時間だから!」
モチロンを転がして奥に追いやろうとした時、ちょうど待ってたかのようにちひろさんが奥のドアからひょっこりと顔を覗かせて、来ま

したよ！と言った。マズいマズい！まだ終わってない！
「未央！」
「了解！」
未央はモチロン持ち上げて自分のスポーツバックに・・・・って！
「違う!!」
「駄目ですか隊長！」
「駄目である未央隊員!!」
何のやり取りだこれ!!とにかく急いで奥にしまってくれ!!
「あのー・・・・」
「少し待ってください!!」
（おい、新人だぞ）
「え？」
ゼノンが俺の意識を刺激し、無理やり冷静にさせられた。落ち着いた俺の後ろには、千枝ちゃんが居た。ぽかんとしている俺の顔は相当変な表情だったと思う。千枝ちゃんもそれをじっと見て、小さく笑った。
「ごめん、取り乱した」
「えへへ、楽しそうでしたね」
俺は待っている二人にも声を掛けた。
「お待ちしておりました。どうぞ、こちらの部屋でおかけください」
「は、はい！」
三人をソファに座るよう促して、自分も対面するような形で座った。一人は明らかに緊張しているようだが、猫耳を付けている女の子は平然としていた。千枝ちゃんは・・・・やっぱり緊張しているようだが、表情には出していないな。
「軽く自己紹介からしましょうか。私は当事務所のプロデューサーです。これからよろしくお願いします」
すると猫耳を着けた女の子が手を挙げて言った。
「みくは前川みくって言うにゃ！前は別の事務所に居たけど、潰れちゃったからこっちに来たのにゃ。猫は古いって言うけど、みくは自分を曲げない、猫系アイドル一筋なのにゃあ!!」

「お、おう。そのつもりだから、安心してくれ」
「はっ、つい熱くなっちゃったにゃ。こほん、Pちゃん、これからよろしくにゃあ～♪」
猫アイドル前川みく。ライブでもたまたま見るときはあったが、結局あまり日の目を見ることが出来なかったアイドルだ。前に居た事務所はプロデュース方針がおかしく、実力があっても鳴かず飛ばずで、結局そのプロダクションは倒産したらしい。みくはその時に、路頭に迷っていたから引っ張ってきた子だ。
次は・・・・
「ナナは歌って踊れる声優アイドル目指して、ニンジンの馬車に乗って、ウサミン星からやって来たんですよっ！キャハッ★」
「あ、はい」
空気が凍るとはこの事なんだろうな。全員開いた口が塞がらなかった。このメルヘンな人は阿部菜々さん。小さなライブステージで一人頑張っているのを見て、その場でスカウトしたのだ。見ての通りウサギ系であるが・・・・・プロフィールがこれまた変わっているのだ。
年齢「永遠の17歳」。出身地「ウサミン星」。・・・・何だか、一昔のアイドルを見ているようだ。当時は人気だったアイドルの髪型をまねて、山口桃山カットなんてのも流行ったらしいし。
「・・・・・あっ、あの、大丈夫です！全力でアイドルになるので、よろしくお願いします!!」
「何にも言ってませんよ!?」
（ウサミン星・・・・我々でも聞いたことがない星だな。最近誕生したというなら、近くの星雲観測局が報告をするはず何だが・・・・）
「いや、そんな星無いから」
あとは千枝ちゃんなんだが、この中で一番最年少なのに、二人より落ち着いている。
「プロデューサーさん、これから、よろしくお願いしますっ」
「ああ、頑張っていこう！」
三人には契約書に印鑑を押してもらい、正式なアイドルとしてこの

事務所に所属することになった。
これから頑張っていこう!!

「・・・・わい、そろそろ出てええか?」
「あっ」